

三好長慶生誕500周年記念イベント 第36回特別展

「天下の支配者」三好殿

—考古学からみた天下人三好長慶の軌跡と飯盛城—



四條畷市立歴史民俗資料館

「天下の支配者」三好長慶

一考古学からみた天下人三好長慶の軌跡と飯盛城一

四條畷市と大東市にまたがる飯盛城跡は、戦国時代に三好長慶が居城とした西日本有数の規模を誇る城跡です。長慶は室町幕府13代将軍足利義輝を京都から追放し、政治の実権を握った武将で、永禄三年（1560）に飯盛城に入城しました。同時代のキリスト教宣教師の文献などに「天下を治めていた」、「天下の支配者」などとして登場し、近年織田信長に先駆ける最初の天下人と評価されています。

飯盛城跡では、近年の調査で石垣を全面的に用いた初期の城であること、大規模な造成を行っていることが判明し、塙を用いた建物跡が検出されるなど、長慶がその重要性を認識し拠点を置いた山城の全容が徐々に明らかになってきています。

この展示では、主に考古学的な資料から、三好長慶が天下人へと至る軌跡を追い、戦国時代史における飯盛城の意義について考えます。

多くの皆さまにご協力いただき特別展を開催することができました。厚くお礼を申し上げます。

お世話になった方々（敬称略）

大阪府教育委員会、大阪府立四條畷高等学校、聚光院、大東市、大東市立歴史民俗資料館、高槻市、東京大学史料編纂所、奈良市教育委員会、西宮市、羽曳野市教育委員会、東大阪市、東大阪市立郷土博物館、広島市立中央図書館、天野忠幸、池田裕美、伊藤聖浩、井上藍、今井真由美、上原真人、内田和伸、大畑博嗣、小野澤虎潤、阿部秋板、黒田淳、坂元直哉、佐々木拓哉、重見高博、瀬尾品太、中井均、中岡久雄、中島康隆、中西克次、中西裕嗣、早川圭、原田憲二郎、福永信雄、村瀬隼、村松直美、喜住之、李聖子。

イラスト：佐野喜美 題字：松岡康池



三好長慶像（聚光院蔵・原本は重要文化財）

会 期：令和3（2021）年10月5日（火）～12月12日（日）

発 行 日：令和3（2021）年10月5日

編集・発行：四條畷市教育委員会・四條畷市立歴史民俗資料館

会 場：四條畷市立歴史民俗資料館（指定管理者：(株)地域文化財研究所）



目次

1. 飯盛城研究の歴史	
江戸時代の城跡認識	4
明治～昭和初期の調査研究	6
四條畷高校地歴考古学部の功績	8
2. 飯盛城の構造と特徴	
飯盛城の全体像	10
南区画—居住域	12
北区画—軍事・宗教域	14
城を取り巻く石垣群	16
3. 天下人三好長慶の軌跡とその後	
誕生—芝生城	20
畿内進出—越水城	21
将軍追放—芥川山城	22
飯盛入城—その支城と家臣配置	25
長慶没後—若江城	30



1. 飯盛城研究の歴史

■江戸時代の城跡認識



河内国飯盛旧城絵図 61×264cm

「美濃加納永井家史料」東京大学史料編纂所蔵、『飯盛城跡総合調査報告書』より



元禄元年（1688）水論御裁許絵図（部分）



宝暦四年（1754）南野村北条村立会絵図（部分）



天明五年（1785）山検地地図（部分）

江戸時代、飯盛城跡は廃城として認識され、絵図に描かれてきました。確認された唯一の城絵図は美濃国加納（現岐阜市）藩主で河内国にも領地があった永井家が作成したものです。その絵図には現在は伝承されない曲輪名称が含まれており、特に「左馬允曲輪」や「三ヶ殿曲輪」は特定の人名（木沢左馬允、三箇頼照）をさすとみられ、たいへん貴重です。

また、四條暖市南野の用水組合に伝えられた古文書群にも、飯盛城跡が描かれた絵図が三種あります。どの絵図にも、山の頂部を平坦にした曲輪と、それを取り巻く石垣が壮大に描かれ、一見して城跡とわかります。これまでは単純に城跡の「イメージ」として見事な石垣を描いたものと考えられてきましたが、調査の進展により、当時山麓から確認できた城跡の姿を念頭に置いて作成された可能性があることが新たにわかってきました。

■明治～昭和初期の調査研究



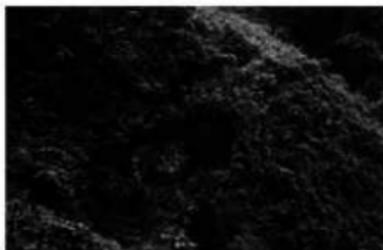
別格官幣社四條畷神社全図（部分） 明治36年



平尾兵吾（1880～1972）

府立畷中『大正8年3月卒業記念』より

明治期に入っても、飯盛城は継続して城跡として認識され続けます。大正11年には、『大阪府全志』で城跡として紹介されました。その後、もと「飯盛山二ノ丸」に鎮座したという御机神社神官の家系で、大阪府立四條畷中学校教諭の平尾兵吾氏が、精力的に現地調査および史資料調査を行います。氏は大阪府史蹟調査会の常任委員で、成果は府の史蹟名勝天然記念物調査報告（昭和3年）および北河内郡教育会の報告（昭和6年）にまとめられました。



平尾兵吾氏調査時の飯盛城跡
大阪府教育委員会提供



飯盛山遊園地絵葉書 上：旧城北出丸
(IV・V郭) 下：高櫓の跡(Ⅰ郭付近)

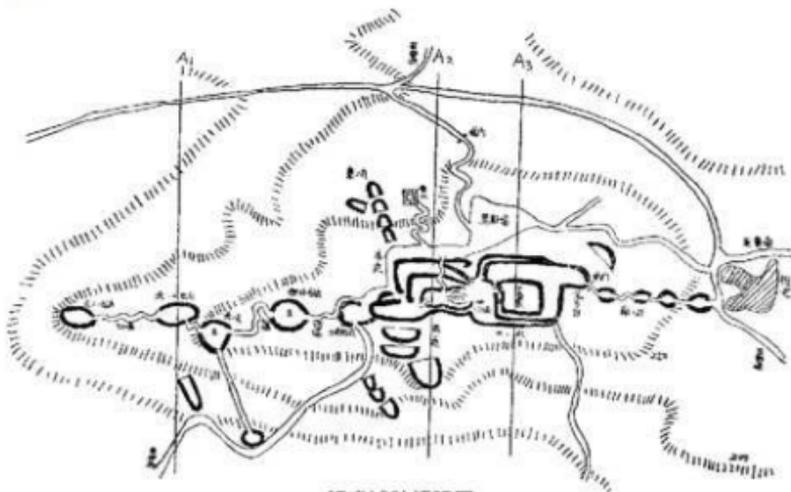


平尾氏によるこれらの報告では、すでに曲輪名称として「本丸」、「高櫓」、
「千畳敷」、「ゴタイ塚」があげられています。「最高地点高櫓から北へ四階
段の平地」を本丸とし（現在展望台があるⅡ郭か）、そこは礎石の布置も
大きさも整っていたといい、そこからは「甕、壺、瓦片、土器、刀剣、金
具の残片」などがみつかったといえます。飯盛山上の遊園地計画が進行し
ていた昭和5年には史蹟調査会委員一同で踏査し、その際のものともみられ
るガラス乾板写真が、大阪府教育委員会に現存します。平尾氏の研究はこ
のように現地調査に裏打ちされた詳細なもので、主要な曲輪についてはほ
ぼ現在の認識とも一致しており、その後の研究の基礎となりました。

このとき計画が進行していた飯盛山上遊園地は、森之宮から四條畷を経
由し奈良へと至る鉄道を計画していた「東大阪電鉄」により昭和5年に建
設されたもので、園地では城跡の遺構の案内も行われていました。

なお、戦前の陸軍省が築城史編さんを企図し、作成された資料の控えが
国立国会図書館に『日本城郭史資料』として現存し、飯盛城跡の縄張図も
作成されており、判明する中で作成年が最も古いものです。

■四條畷高校地歴考古学部の功績



飯盛城跡縄張図

坂元直哉1967「河内飯盛山城」『城春』第8号、日本城郭近畿学生研究会発行より



クラブによる飯盛城関係刊行物
府立畷高蔵（中央）、個人蔵（左右）



前頁左上・19頁右下と同一石塚 1965年頃

大阪府立四條畷高等学校に考古学クラブが誕生したのは、昭和20年代のことでした（第1期）。その後、一時クラブは休眠状態にありましたが、坂元直哉氏を中心として復活しました（第2期）。のちに二度目の休眠期を経て、平成8年頃再復活し、少なくとも平成16年頃まで活動していました（第3期）。顧問山口博氏が指導した第2期には精力的に飯盛城の調査研究を行い、その成果は部誌にまとめられ、坂元氏により学会にも報告されました。



発掘調査（1967年12月）と文化祭発表（賑高祭・1967年9月29日～10月1日）

大阪府立四條畷高等学校提供



昭和42年（1967）発掘調査でみつかった遺物（左：報告図、中：現物）

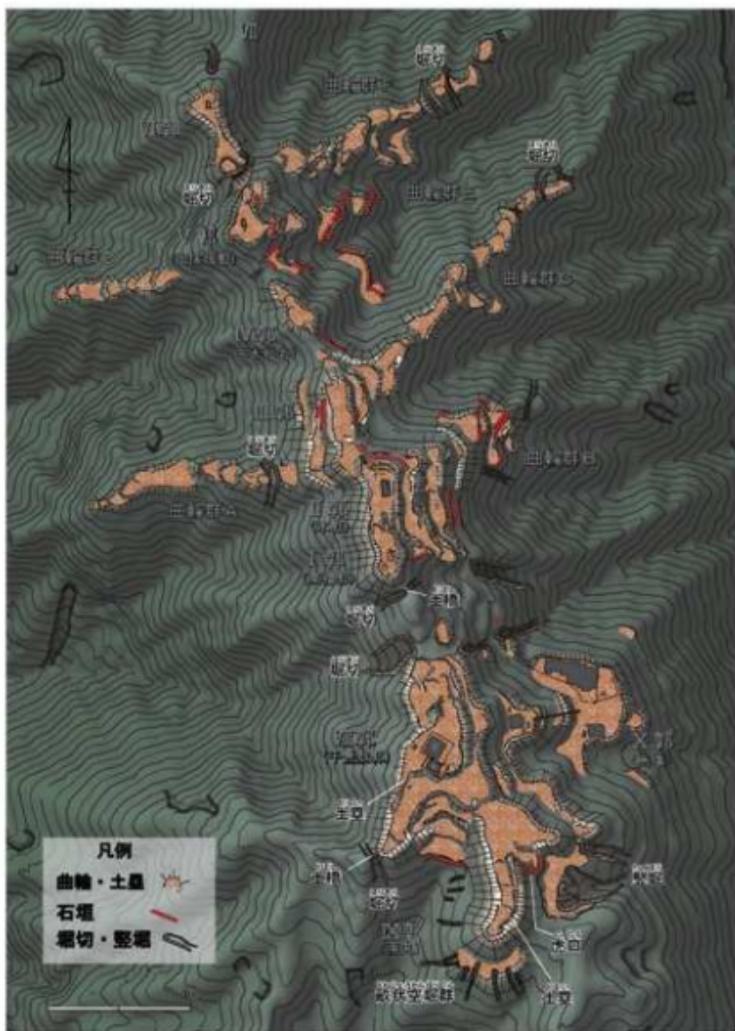
左：『飯盛城東の丸一の曲輪調査報告』1968年より 中・右：大阪府立四條畷高等学校蔵

その研究の大きな成果は、縄張^{なわばり}の配置を図面とともに報告したことで、以後の研究の礎となりました。調査は現地での実測を伴う高い精度のもので、初めて主要部以外の東西の尾根にのびる曲輪群が認識されました。

坂元氏の卒業後もクラブでは飯盛城の調査を継続し、昭和42年には5月と12月に「東の丸一の曲輪」において発掘調査を実施しました。翌年に報告書をガリ版刷りで刊行しており、調査写真、日誌、出土遺物の一部が現在も四條畷高校社会科教室に保管され、内容を知ることができます。調査は土層を細分し、測量により調査地区や遺物出土位置を記録するという、学生主体でありながらたいへん高い精度で行われました。

2. 飯盛城の構造と特徴

■ 飯盛城の全体像 (所在地: 大東市大字北條・四條畷市大字南野)





飯盛城跡赤色立体地図



飯盛城跡航空写真

四條畷と大東の両市で平成28年から飯盛城跡の総合調査を行った結果、城域が東西400m、南北700mで、西日本有数の規模であることが判明しました。城域は北端と東端と南端は堀切・塹壕、西側は自然地形によって限られています。今回の調査で、飯盛城跡では石垣が城域のほぼ全域に分布し、礎石建物を建築し、建物屋根に瓦を導入していた可能性が高いことがわかりました。石垣・礎石建物・瓦の3つの要素が本格的に城郭へと取り入れられるのは、織田信長が築城した岐阜城(永禄10年・1567)・安土城(天正4年・1576)からとされますが、飯盛城が城郭の機能を失うのは、三好長慶の跡を継いだ義継が若江城に移った永禄12年(1569)頃で、「織豊系城郭(高石垣や瓦葺で礎石建ちの高層建築の天守を持つ)」に先行して3つの要素を取り入れた稀有な事例といえます。戦国時代の政治、軍事を知るうえで貴重として、令和3年6月18日に開催された国の文化審議会で国史跡に指定するよう文部科学大臣に答申されました。

■南区画—居住域（千畳敷郭）



Ⅶ郭（千畳敷郭）でみつかった建物の礎石 大東市提供



曲輪造成の盛土 大東市提供



小柄（小刀の柄） 大東市提供

城域の南側のⅧ・Ⅸ郭は主に居住域とみられます。Ⅶ郭（千畳敷郭）では発掘調査で建物礎石がみつき、広大な曲輪を造成するために、土を削ったり盛ったりする大土木工事が行われたことが判明しました。元々あった尾根の西側を岩盤まで削り、削り取った土を北東側斜面に運び、斜面に10～20cm厚で平らに薄く十数回敷きならす工法により盛土をして平坦面を広げており、その厚さは深い所で約2mありました。

■南区画—居住域（南丸）



Ⅸ郭（南丸）調査の様子 左端（東）は土塁 大東市提供

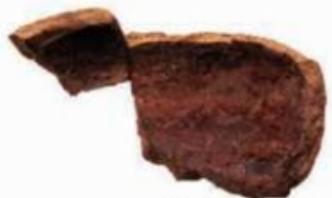


曲輪南端の建物の柱跡 大東市提供



建物の壁土 大東市提供

Ⅸ郭（南丸）はⅧ郭を守る役割を果たしました。出土資料から土壁の礎石建物が建っていたと考えられ、曲輪南端には櫓のような建物があった可能性があります。取鍋とりなべの出土からは軍事に用いる金属製品の製作がうかがえます。



金属製品製作用の取鍋とりなべ 大東市提供

■北区画—軍事・宗教域（御体塚郭）



埴列建物の跡（点線内）



埴（タイル） 33.5 × 34.0 cm



埴列建物付近採集の鉛製銃弾 径1.3cm

城域の北側のⅠ郭～Ⅵ郭は主に防御・軍事域として利用されたとみられます。このうちⅤ郭（御体塚郭）は、中心となる曲輪のやや西寄りに露岩が存在します。三好長慶が永祿7（1564）年に没した際、その死を秘すため仮埋葬された場所と伝えられてきました。周辺の石垣調査で瓦がみつかったことから建物の存在の有無を確認するため発掘調査した結果、約4 × 6 mの規模と推定できる埴列建物を確認しました。

埴列建物の上部構造は、壁土の出土から土壁で、屋根は棟の上に乗せる雁振瓦が出土するものの軒瓦がないことから、棟のみ瓦葺とみられます。埴列建物は蔵である場合が最も多いですが、この埴列建物は耐火構造である蔵とするには次のような疑問があります。第一に、建物が曲輪の端に近い位置にあること、次に、瓦は棟のみとみられ完全な耐火構造でないことです。飯盛城の埴列建物は類例から檜ひのきの可能性があると考えています。



建物基礎とみられる石組み

博列建物の北側でも同方位に配置された石組みを確認しました。戦国城郭では礎石列建物や礎敷建物と呼ぶ石組み基礎構造の建物があり、その一部の可能性があります。

この石組みの東に隣接した位置で、類例の少ない台付皿が出土しました。奈良市春日大社では、「ごんばい」と称する台付皿たいつきさらが中世から現代まで祭儀において神饌しんせんを盛ったり灯明器として使われたりしており、周辺の人々は境内で棄てられたものを拾い再利用したといえます。奈良市内から飯盛城までは18km程で、松永久秀ながのひさひでが1561年に多聞城たもんじょうに入城し活発な行き来があったとみられ、両者の関連が想定できます。このことから、この建物には神社社殿など特殊な機能があった可能性があり、この曲輪は宗教的な空間を意図していたのかもしれませんが。



付近で見つかった台付皿 高さ2.6cm



春日大社周辺で出土した「ごんばい」
奈良市教育委員会蔵



現代の「ごんばい」 個人蔵

■城を取り巻く石垣群



Ⅷ郭（千畳敷郭）南側の石垣 大東市提供

飯盛城の大きな特徴は石垣を多く用いていることです。これまでは部分的な使用と考えられてきましたが、城内全域で分布調査を行い、各所で詳細な測量調査を進めた結果、城の全域に石垣が用いられていた可能性が高まり、織田信長が築城した岐阜城や安土城に先行する本格的な「石垣づくりの城」といっても過言ではないことがわかりました。



虎口の石垣 大東市提供

このことを明らかにしたのがⅧ郭（千畳敷郭）南側で発見された石垣で、全長22mにおよぶ長大なものです。また、それまで知られていた虎口こぐちの石垣も、虎口東側の曲輪を全面的に取り囲むように築かれていることが調査で新たに判明しました。



I 郭（高檜郭）・II 郭（本郭）東側の石垣 大東市提供



上写真の石垣の下段 大東市提供



下段の石垣（昭和初期） 大阪府教育委員会提供

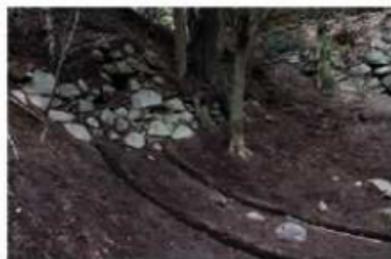
I 郭（高檜郭）・II 郭（本郭）東側の斜面下に築かれた石垣はハイキング道沿いであり、平成30年7月豪雨で一部崩落するまでは最も見学しやすい石垣でした。

分布調査でハイキング道斜面の下段にも石垣があることが新たに判明し、段築状石垣であることがわかりました。このことから、ハイキング道はかつて帯曲輪おびぐるわであったと考えられます。

下段の石垣は長さ44mあり、石垣が崩れないように途中で隅角部をつくって石垣を補強しています。隅角部は近世城郭でみられる算木積みにはなっていない。現在、石垣の前面は急斜面になっていますが、昭和初期の写真を見ると、前面に人が通れる幅の平坦部があり、この部分も帯曲輪状になっていた可能性があります。



V郭（御体塚郭）南東の石垣群（東から） 奥の石垣が入角をもつ



V郭南東の石垣群（南東から）



V郭（御体塚郭）へと続く城内の道

V郭（御体塚郭）付近では、分布・測量調査で多数の石垣を発見しました。郭の南東では、ほぼ90度に接続し入角をつくる石垣を確認しました。飯盛城の石垣は地形に沿ってカーブさせる石垣が多く、珍しいものです。その上部は現在ハイキング道で、帯曲輪と考えられます。

下段の石垣は南東へと続いており、その上部は城内の通路となる道であり、東山麓からの登城道と推定しています。この道部分の調査では、傾斜がきつい箇所には階段状に石積みを設けていることがわかりました。



V郭（御体塚郭）東側尾根の段築石垣



V郭（御体塚郭）東側尾根の石垣群



虎口の可能性がある石垣群

7頁左上・8頁左下と同一

V郭（御体塚郭）東側尾根の曲輪群には数多くの石垣が築かれていました。高石垣は築かず、ほぼ垂直に近い立ち上がりで比較的低い石垣を段築状に築くことが特徴で、セットバックをしながら3段以上の石垣が曲輪の前面を取り巻いていました。この付近は、一連の曲輪群に幾重にも石垣が取り巻き、そこを縫うように城道が通る壮大な曲輪群であったと考えられます。その中には虎口の可能性がある特徴をもつ石垣群もあり、左ページの城内通路に道が続く可能性があります。

3. 天下人三好長慶の軌跡とその後

■誕生—芝生城（徳島県三好市三野町芝生）



芝生城跡 現在は水田となっている 個人提供

三好長慶は、大永二年（1522）2月13日に、曾祖父三好之長の代からの三好氏の居城とされる阿波国芝生城（徳島県三好市）で生まれたといわれ、その後幼少期は当時守護所が置かれた勝瑞城館（徳島県藍住町）で過ごしたと考えられています。父三好元長は室町幕府12代將軍足利義晴と対抗した「堺幕府」の実力者でしたが、享祿5年（1532）に主君細川晴元の差し金で蜂起した一向一揆により追い詰められ堺で自害しました。数え年11歳の長慶（幼名千熊丸）は当時堺にいましたが、一揆勢襲来前に命からがら阿波に落ち延びたといえます。

翌天文2年（1533）6月には、一揆勢が増長し細川晴元も手が付けられなくなり、数え年12歳の千熊丸は、一揆を率いる本願寺の証如と晴元との和睦を斡旋しました。その後元服し、早くも歴史の表舞台に登場してきます。（長慶の名は時期によって変遷しますが、これ以降は長慶で統一します）

■畿内進出—越水城（兵庫県西宮市）



越水城跡と発掘調査地（昭和23年8月米軍撮影） 国土地理院



平成3年の発掘調査 西宮市提供



みつかった瓦・陶器 西宮市蔵

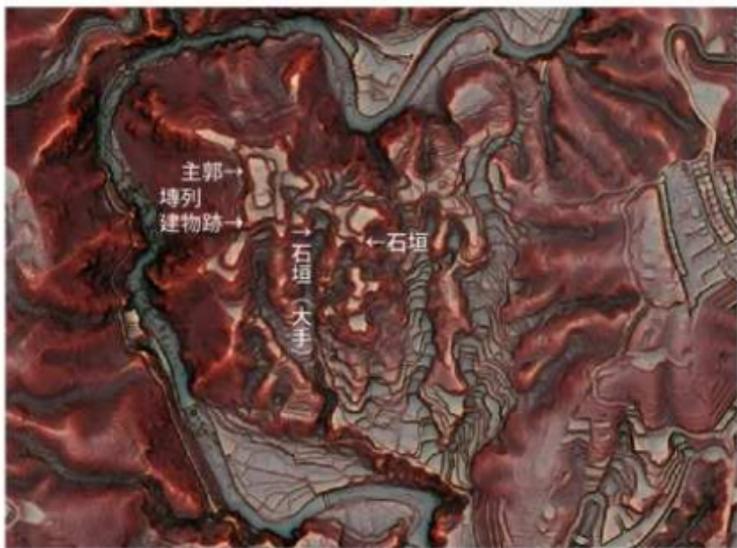
越水城は阿波と畿内とを結ぶ位置にある重要拠点で、天文2年（1533）9月に攻め取られた際には長慶はすぐさま奪還しています。長慶は翌天文3年に父の仇である細川晴元に臣従し、天文8年（1539）にはこの城を居城としました。

越水城跡は現在住宅地ですが、昭和23年にはまだ城跡が森状に残っていました。隣接する小学校敷地内の発掘調査で城跡と関連する可能性のある同時期の溝がみつかリ瓦などが出土し、城跡の碑が移設されています。

■ 將軍追放—芥川山城（高槻市）



芥川山城跡遠景 高槻市提供



芥川山城跡赤色立体地図 高槻市提供



主郭でみつかった礎石建物 高槻市提供



大手の石垣 高槻市提供



中央曲輪群の石垣 高槻市提供

天文17年（1548）、三好長慶は細川晴元から独立し、翌年晴元を打ち破りました。晴元は室町幕府13代將軍足利義輝とともに長慶に対抗しますが、天文21年（1552）和議が成立し、長慶は將軍家直臣の御供衆となりました。しかし天文22年（1553）、和議を破った義輝を長慶は敗走させ、義輝は近江国朽木（滋賀県高島市）に逃れました。同年長慶は芥川山城を攻略して居城を移し、義輝はこの後5年間京に戻れないまま、長慶が芥川山城から京の政治を執り行いました。



埴列建物がみつかった様子 高槻市提供



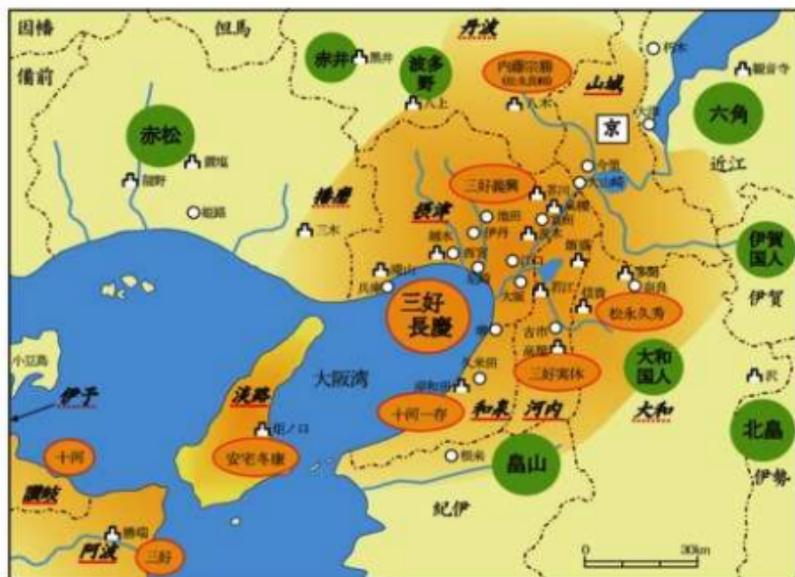
埴の石突（刃と逆側の金具） 高槻市蔵



埴 高槻市蔵

長慶が畿内の政治を動かす拠点とした芥川山城は、東西約500m、南北約400mの規模で摂津国最大の山城です。堀切や土塁などの遺構がよく残り、大手の脇など一部に石垣も築かれています。主郭の発掘調査では大型の礎石建物が1棟みつかり、部屋数は4部屋以上、その周りには縁がめぐらされていたことがわかっています。主郭南側の一段下の曲輪でも調査が行われ、礎石建物に加え4.2m四方の規模の埴列建物がみつかりました。眺望に優れた場所に立つことから、櫓である可能性が考えられています。

■飯盛入城—その支城と家臣配置



三好氏勢力図（永禄4年頃。国名下の実線は掌握した国、点線は一部を掌握した国）作成者提供

三好長慶が実現した足利将軍を推戴しない中央政権は、戦国時代において異彩を放つもので、長慶は首都の京を含め当時「天下」と呼ばれた畿内に加え、周辺の国々をも治めた、「最初の天下人」でした。のち永禄元年（1558）に將軍義輝と和睦しますが、その勢力はむしろ増大し、永禄3年（1560）10月には河内国を平定し、翌月飯盛城に居を移しました。

この翌年にかけての頃が長慶の最盛期で、自らは河内北部の飯盛城に居し、摂津芥川山城に嫡男義興、河内南部高屋城に阿波国衆を率いる長弟実休、和泉岸和田城に讃岐国衆を率いる三弟十河一存と親族を置き、淡路は淡路水軍を率いる次弟安宅冬康に固めさせ、大和に松永久秀、丹波に久秀の弟内藤宗勝といった重臣を向かわせています。他に播磨、伊予にも進出し、丹後、若狭に出兵するなど十数か国に影響力を行使しました。

しかし、後に嫡男や弟に相次いで先立たれ、綻びが生じていきます。

■高屋城（三好実休（之虎））



昭和23年の高屋城跡 曲輪の配置がよくわかる 羽曳野市教育委員会提供



「櫓台」調査の様子 大阪府教育委員会提供



埴列建物跡 羽曳野市教育委員会提供



桐紋散双鶴鏡 羽曳野市教育委員会蔵

高屋城は河内国の守護所で、守護
畠山氏の居城でしたが、永禄3年
(1560) 10月、三好実休（出家前は
之虎）が攻略し、そのまま実休が配
置されました。城跡はほとんどが宅
地化されていますが、発掘調査で建
物や園地の跡が見つかっています。

■多聞城（松永久秀）



多聞城跡発掘調査の様子 昭和53年 ＊奈良市教育委員会提供



多聞城創建時の軒瓦＊



みつかった陶磁器＊

大和国（奈良県）には永禄2年（1559）、長慶の家臣松永久秀が進出し、永禄4年（1561）奈良市北方の多聞城を築城開始しました。翌年には棟上げが行なわれています。城跡は幾度か発掘調査され、記録に残る瓦葺の城の存在が裏付けられています。大和に加え堺の瓦工も動員されました。

久秀は江戸期以来謀反を繰り返した梟雄とされましたが、近年再評価が進み、自らを取り立てた長慶父子への忠義に篤かったといえます。

■飯盛城の支城—田原城



田原城と千光寺跡



発掘調査中の田原城堀跡

田原城は天野川沿いにあり、飯盛城の東に位置します。土豪田原氏の拠点で、長慶の飯盛入城後は飯盛城の東の守りを担いました。谷を挟んだ北側では田原氏の菩提寺千光寺の跡が発掘調査され、天正九年銘のキリシタン墓碑がみつかっています。



田原礼帽キリシタン墓碑（府指定）

■飯盛城の支城—野崎城・龍間城



野崎城跡
赤色立体地図



龍間城跡
赤色立体地図

野崎城・龍間城は飯盛城の南～南西に位置します。尾根続きで防備の手薄な南方の守りを担ったとみられます。野崎城は山塊から突き出た尾根にあり、眼下の東高野街道にらみを利かせました。いずれも赤色立体地図の作成により、より詳細な縄張り配置が判明しました。

■飯盛城の支城—岡山城

岡山城は甲可郷に拠点を置いた結城氏の居城とされ、結城進斎忠正は剣術の名手で幕府奉公衆から三好長慶に仕え、松永久秀に属したといえます。

城跡は忍ヶ岡丘陵上と言われ、忍岡古墳が存在する場所で、後に大坂夏の陣の際、將軍徳川秀忠が藤堂高虎の先導で陣を築き、それを描いた広島藩浅野家旧蔵の絵図が現存します。

現在城跡上には忍陵神社が鎮座します。発掘調査で城跡の遺構は確認できていませんが、丘陵の高さはほぼ同一で、当時をしのぶことができます。



諸国古城之図・砂岡山御陣城
広島市立中央図書館提供（浅野文庫）

■長慶没後—若江城



若江城の埦列建物跡 東大阪市提供



堀の跡 東大阪市立郡土博物館提供



堀内の逆茂木 東大阪市提供

長慶は永禄7年（1564）、飯盛城内で没し、その死は3ヶ年の間隠され永禄9年（1566）6月に真観寺（八尾市）で葬礼が行なわれました。長慶の権力は養子義継よしのつぐに引き継がれ、永禄8年（1565）5月には室町幕府13代將軍足利義輝あしかがよしのてるを攻め滅ぼします。しかし、その後補佐していた三好三人衆と敵対して、対立していた松永久秀と結び、永禄11年（1568）には足利義昭あしかが（のちの15代將軍）を推す織田信長の上洛に協力しました。この後、義継は飯盛城から若江城に移り、飯盛城の城郭機能は終焉を迎えます。



陶磁器・硯 東大阪市立郷土博物館蔵



矢じり（鉄鏃） 東大阪市立郷土博物館蔵

義継は元龜4年（1573）に信長により追放された義昭を若江城でかくまったため攻められ、落城して自害し三好家の嫡流は断絶しました。

若江城はその後信長の本願寺攻めや雑賀攻めの拠点として利用されましたが、天正年間（^{てんしょう}）に廃されました。

これまでに発掘調査でみつかった多くの遺構や遺物は、大半がこの時期のもつとされますが、多くみつかる陶磁器や瓦は、この城の当時の威容を物語り、矢じりなどの武器類の出土は、ここが確かに戦国の戦いの舞台であったことを示しています。

まとめ—三好家のその後—



正願寺の門の瓦に残る
三階菱の家紋
(四條畷市南野)

義継の妹の子は三好姓を受け継ぎ、浅野家に仕え広島藩士となりました。

長慶の父の又従弟三好宗満は三好三人衆の一人で、その弟為三はのちに徳川秀忠に仕え、旗本として代々南野村（四條畷市）を領しました。長慶が天下を見据えた故地で、一族の子孫が領主になったのです。四條畷市南野にある正願寺の瓦には、それを示す三階菱の家紋が、現在も残されています。

※この冊子では、「提供」とする場合は各機関提供の写真、「蔵」とする場合は各機関所蔵品を四條畷市教育委員会が撮影した写真です。



'O governante do mundo' Miyoshi Ōtō
2021.10.05-12.12